

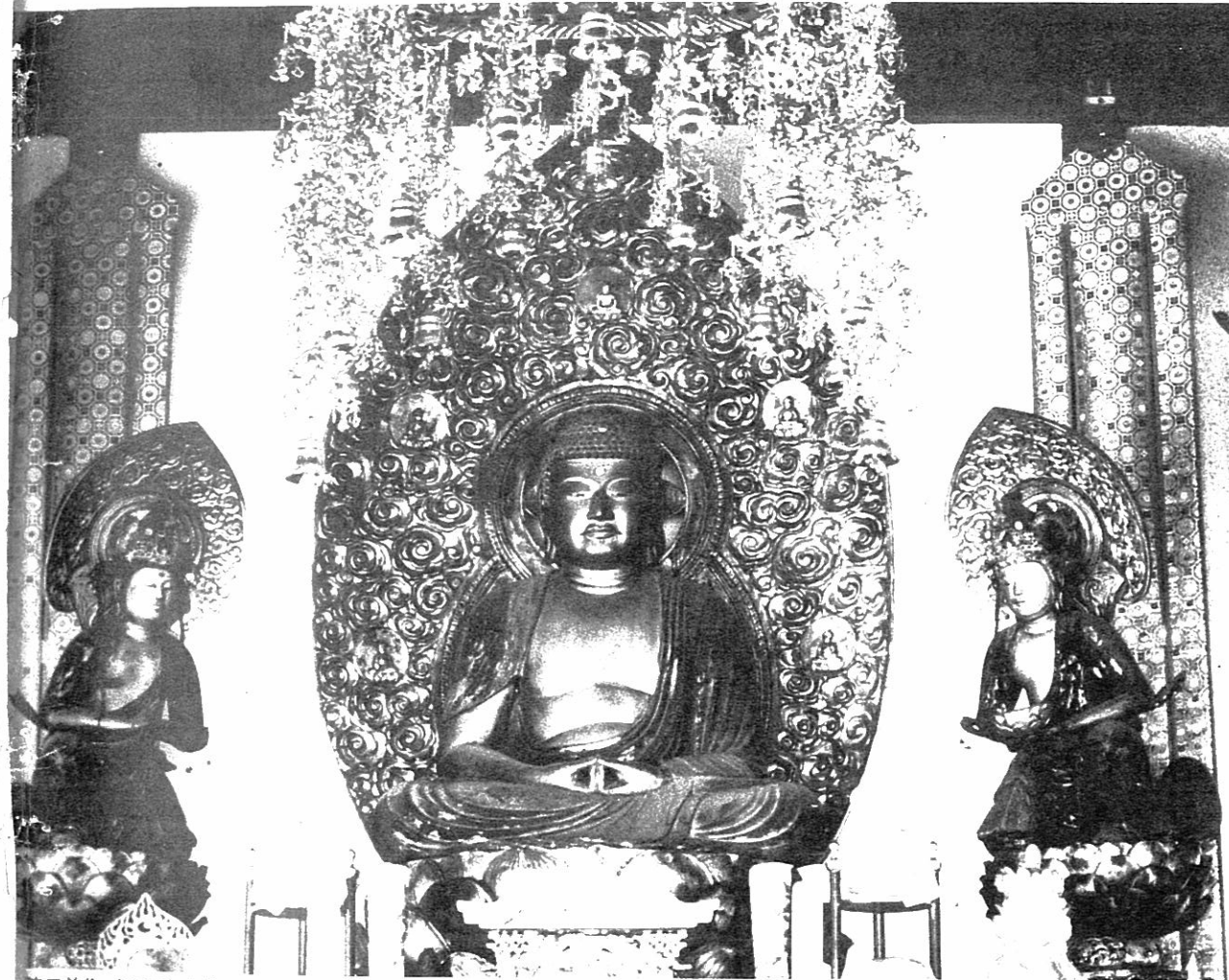
仙台市文化財パンフレット第6集

仙台市の仏像彫刻 I

(如来部)



文化財愛護シンボルマーク



陀三尊像 (真福寺本尊; 江戸時代初期)

仙台市教育委員会
昭和57年3月

緒 言

我国の彫刻は近世・近代になりはじめて種類や内容に多少の変化をもってくるが、それ以前は殆んどが仏教あるいはそれに関係するもの、つまり仏像彫刻で占められていた。確かに仏教伝来以前にも土偶や埴輪といった素朴ながらも優れた感覚の彫刻もみられてはいるが、これらはまだ純粋な意味で本当の彫塑といえるものではなかった。従って、現在文化財といわれている彫刻は、全てが仏像彫刻といっても過言ではなからう。

そこで今回の文化財パンフレットでは、前回までの古建築編に変わって、彫刻編の第一回「仙台市の仏像彫刻Ⅰ（如来部）」と銘うち仙台市内の仏像彫刻、特に如来部に焦点を合わせて、その主要なものを掲載した。ところで、仙台市内の仏像彫刻は総体的に江戸時代それも元禄時代を中心とした江戸前期の作例が大多数を占めていること、しかも一寺院で所蔵している数が比較的少ないという特徴がみられる。江戸前期の作例が多いということは全国的にもその傾向があるとはいえ、これらは市内の寺院の大半が伊達氏とともに所領を移動してきたものであること、藩政時代から今日に至るまで幾度か寺町が火災等の災害を受けていることが、その一因と考えることが出来よう。なお、本冊子の作成にあたり次の方々の御協力をいただいた。心から御礼申し上げる次第である。

阿弥陀寺・円徳寺・正円寺・成覚寺・昌繁寺・正楽寺・真福寺・仙岳院・大梅寺・大法寺・大林寺・東光寺・報恩寺・龍泉院・龍宝寺・輪王寺・東北大学文学部東洋日本美術史研究室

例 言

1. この小冊子は仙台市教育委員会が一般市民の文化財保護思想の啓蒙普及を目的として編集発行している仙台市文化財パンフレット第六集である。
2. 執筆にあたっては仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係主事渡辺洋一が当り、同主事山口宏、及び東北大学文学部OG岡崎修子がこれを補佐した。
3. 本冊子の構成は、まず種別にその概要を記し、その後、その具体例として仙台市内にある仏像彫刻を紹介する形をとった。
4. 仏像彫刻の紹介にあたっては、主要なもの数例について所在地・法量・年代・材質を明記し、若干の解説を加えた。
5. 本冊子掲載の写真は、所有者の了承を得て渡辺が撮影し、掲載したものであるので無断で転載することを禁じる。

I 概 説

仏像とは、仏教の信仰の対象として創造された仏界の仏（仏界において悟りを開いたもの）を彫刻や絵画で表現したものである。つまり、それが如来であり、本来の仏像という如来像のみをいう。

しかし、一般には悟りを開くための修行中の姿を表わした菩薩像、仏法を守る明王像、天部像、そして高僧の肖像を含めて仏像と呼び、仏教美術史上これらを分類して、如来部（仏部）、菩薩部、明王部、天部、雑部（肖像や神像等）等に分類される。

如来部には、釈迦如来（釈迦牟尼仏）、阿弥陀如来、大日如来、薬師如来、毘盧遮那如来等が含まれる。如来部像の特徴としては大日如来をのぞき、悟りを開いた後の仏の簡素な法衣だけをまとう姿を表わし装飾を施さないことである。

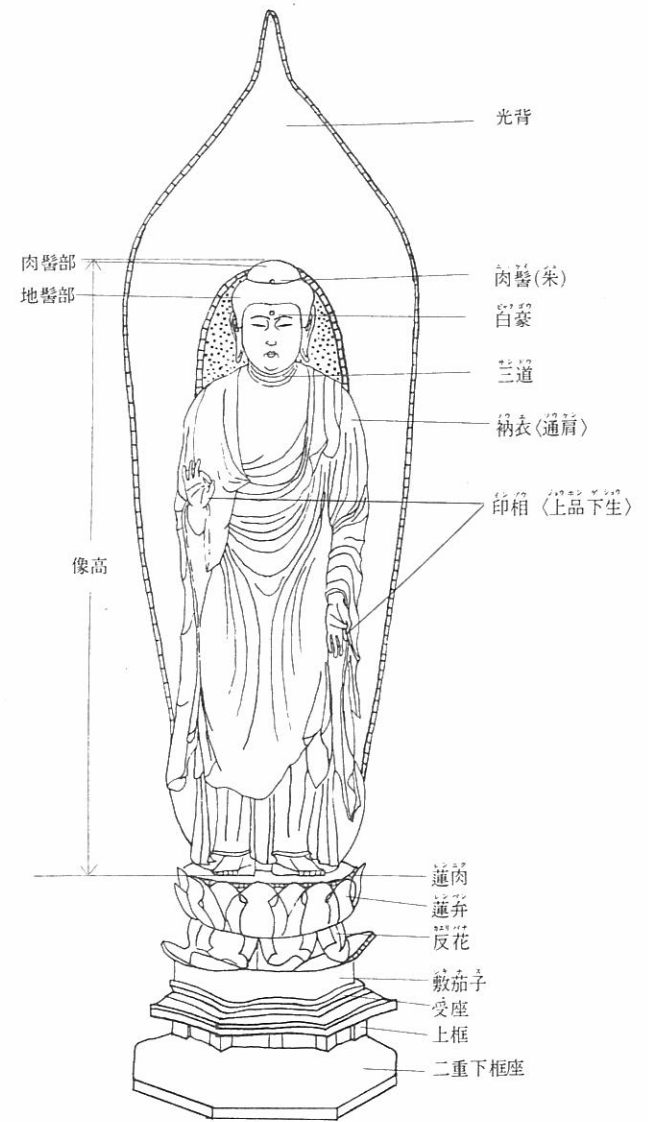


図1. 阿弥陀如来立像略図（阿弥陀寺蔵）

釈迦如来



写真1. 釈迦三尊像 (仙岳院本尊; 江戸時代中期)

釈迦牟尼如来、釈迦牟尼仏ともいい、仏教の開祖ゴータマ・シッダルダ (釈迦、BC、303～383)の姿を表わしたもので、普通「お釈迦様」の愛称で親しまれている。如来部像では最も一般的でその数も多い。

像形は、脇侍に普賢菩薩 (右)、文殊菩薩 (左) を従えた三尊形式を有するもの (写真1) が多く、その殆どが寺院の本尊としてまつられている。また釈迦の誕生の姿をあらわした誕生仏 (写真2) や、釈迦入滅の姿をあらわした涅槃像といった仏伝による像もある。



写真2. 誕生仏 (大法寺蔵)

阿弥陀如来

無量寿仏、無量光仏ともいい、西方極楽浄土の教主として、生物を救うと信じられている仏で特に、いわゆる浄土三部経 (無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経) を基本経典とする。浄土教が盛んになった平安中期以降その多くがつくられ、浄土系の寺院の本尊としてまつられているものが多い。

像形は観世音菩薩 (右)、勢至菩薩 (左) を脇侍とした三尊形



写真3. 阿弥陀三尊像 (正円寺本尊; 江戸時代初期?)

(写真3) 式のものが一般的であるが、単独仏 (写真4) も多い。また鎌倉以降になると阿弥陀来迎図にみられるような二十五菩薩をたずさえた作例も見出すことも出来る (写真5)。



写真4. 阿弥陀如来坐像 (仙岳院蔵; 江戸時代中期)

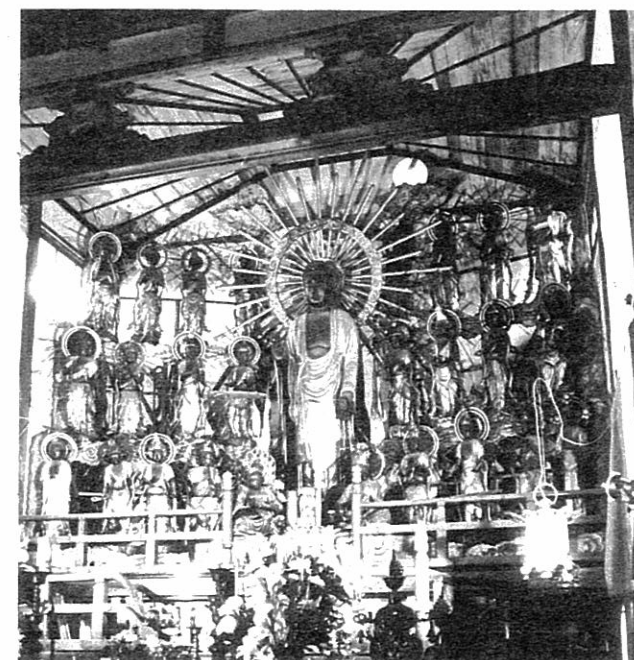


写真5. 阿弥陀如来立像・二十五菩薩付 (報恩寺本尊; 江戸時代)

薬師如来

別名薬師瑠璃光如来ともいい、「お薬師さま」の愛称で親しまれている。

普通、薬師如来といえば薬壺を持った像であることから、除病安楽、息災離苦などといったきわめて現世利益的な崇拝の対象となったことから、古来よりこの如来に対する信仰が盛んに行なわれた。それは奈良時代国家安寧を目的として全国に建立された国分寺の本尊としてまつられたことからわかる。

なお、薬師如来は、釈迦如来や阿弥陀如来同様三尊形式のものが多く、この場合脇侍として右に月光菩薩、左に日光菩薩を安置する(写真9)。なお、この如来の守護神として十二神将(写真37~48)と一緒にまつられていることが多い。

仙台では、陸奥国分寺(秘仏)、仙岳院等に類例がある。



写真6. 磨崖仏 (穴薬師; 東光寺蔵; 南北朝時代)



写真8. 薬師如来坐像
(仙岳院蔵; 江戸時代初期)



写真7. 薬師如来坐像
(東光寺本尊; 江戸時代)



写真9. 薬師三尊像 (懸仏; 仙岳院蔵; 江戸時代)

毘盧遮那如来

奈良東大寺大仏に代表されるように、仏教伝来以前よりあった日の神への崇拝とむすびつき太陽神をあらわすものとして造り出された如来である。即ち仏の根本の姿として表わされる点においては大日如来と同様であり、大日如来とは、この毘盧遮那如来を更に展開したものと考えることができる。

仙台における類例としては、北六番町にあった大仏堂本尊と大仏前大仏堂の本尊の二例あったが、戦災により焼失し、現存するものはない。

大日如来



写真10. 大日如来坐像
(龍泉院本尊; 室町時代)

密教における根本仏として考えられ、この大日如来からすべての仏、菩薩が現われるといわれる。元々は太陽を表わしたもので、仏の智慧が广大で、あらゆるところを照らすことを象徴したもので、宇宙の真実の有様を仏格化した如来ということが出来る。すなわちこの宇宙の存在や現象がすべて大日如来から現出したものであるから、そのそれぞれが真理を表現しているという。密教の教理の根本を示した教主と考えられている。

なお、この大日如来の特徴としては、他の如来とは異なつて菩薩形、つまり髪の毛を冠状に上に結びあげており、智拳印(両手で拳を造り、左手の人差し指を立てて、右手の拳の中に握る:写真11)を結んだ金剛界大日如来と、法界定印(左掌の上に右掌を重ね、軽く両手の親指の先端をつけた形:写真12)を結んだ胎藏界大日如来とに分かれるが、仙台では胎藏界大日如来の類例は今のところみられない。

金剛界大日如来の方は写真10の龍泉院本尊の他に東禅院(曹洞宗:種次寺西62)、薬王寺(真言宗智山派:飯田字屋敷17)、弥勒院(真言宗智山派:八幡一丁目19)、龍宝寺(真言宗御室派:八幡四丁目8-33)、仙岳院(天台宗:東照宮一丁目1-16)、寛行院(天台寺門宗:八幡四丁目5-2)等に類例がある。



写真11. 智拳印



写真12. 法界定印

五智如来

彫像の場合、塔内に五仏一具の像として造像されるのが、典型とされたが、その遺例は少ない。この五仏は、法界体性智を大日如来とし、大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智をそれぞれ具現するものとして、五智如来ともいわれる。また、これらの諸尊は、大日如来を中心に方位に従って四方に配されることから、四方四仏ともいわれ、金剛界では、東南西北の順で、阿閼、宝生、無量寿、不空成就の各如来が、胎藏界では、宝幢、開敷華、無量寿、天鼓雷音の各如来が相当する。いずれも、大日如来の絶対者としての知恵が、この世に作用する働きを示したもので、阿閼如来の役割は、その知恵を鏡のようにてらしだすはたらき（大円鏡智）、宝生如来はあらゆるものに平等にいきたらせるはたらき（平等性智）、無量寿如来は、その知恵がすべてのものをすみずみまで観察する役（妙観察智）をはたし、不空成就如来は、その知恵を具体的行為に表わすはたらき（成所作智）を示している。胎藏界五仏についても同方位の如来は同じ作用を表わすと考えられる。

図2、3は、大日如来を主尊とする両界曼陀羅の胎藏界中台八葉院、金剛界成身会それぞれの諸尊配置を図示したものである。(如来以外の名称については省略)

なお、仙台では龍泉院（曹洞宗：東九番丁26）、大蓮寺（曹洞宗：東仙台六丁目13-26）の2ヶ寺に彫像の例がある。

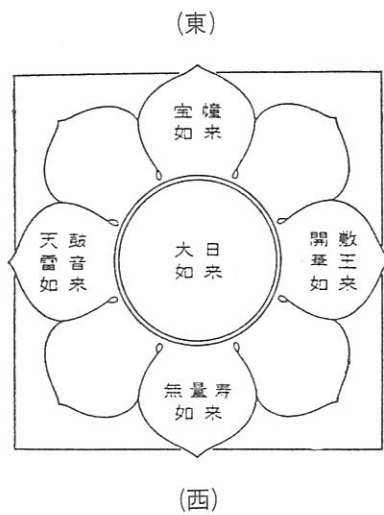


図2. 胎藏界中台八葉院諸尊配置図

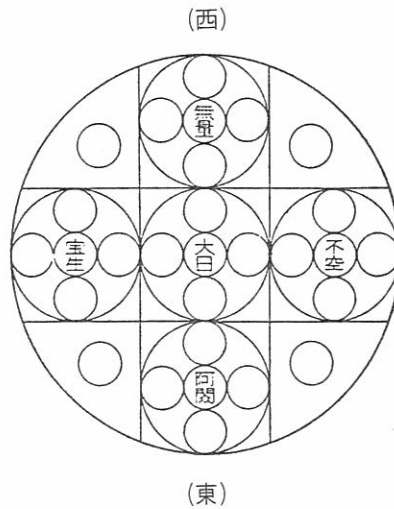


図3. 金剛界成身会諸尊配置図

金剛界五智如来
(龍泉院本尊)



写真13. 無量寿如来坐像
(阿弥陀如来)



写真14. 宝生如来坐像



写真15. 大日如来坐像 (金剛界)



写真16. 不空成就如来坐像



写真17. 阿閼如来坐像

II 主な作例

釈迦如来立像 (国指定重要文化財：明36.4.15.)



写真18. 全景 (正面)



写真19. 上半身

の衲衣がくびもとまでおっており、他の像のように胸元に肉身をみせることがなく、その衣文も独特の形をしていること (写真20)、像の体形のわりに手足が大きいことなどがあげられる。

龍宝寺の像は、元々栗原郡金成町の福王寺の本尊だったものを元禄時代に四代藩主伊達綱村が龍宝寺の本尊として迎えたといわれ、現在、寺内釈迦堂に江戸初期の作と思われる普賢・文殊両菩薩坐像を脇侍にしたがえた三尊仏として安置されている。

なお、像内部には室町時代の永永3年(1532年)に修理した旨の墨書銘がある。



写真20. 面部

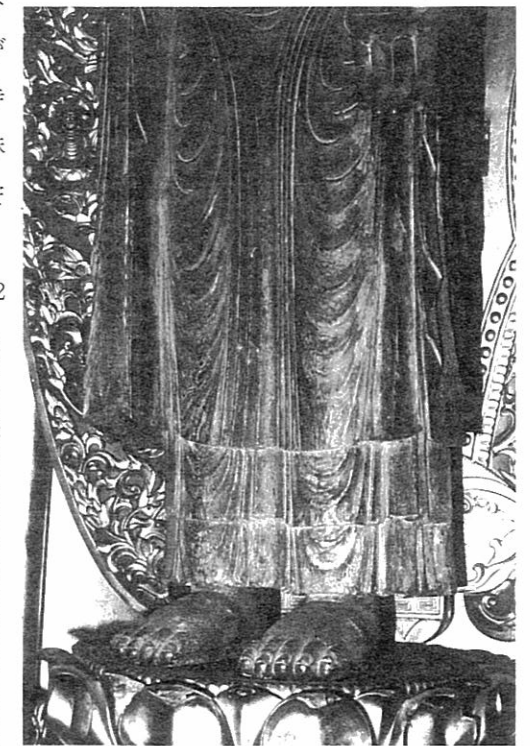


写真21. 下半身

所在地 仙台市八幡四丁目8-33
真言宗御室派恵澤山龍宝寺

像高 160.25cm

製作年代 鎌倉時代

材質 檜か?

京都嵯峨の清涼寺にある釈迦如来立像を模刻したものを、一般に清涼式釈迦如来像、もしくは単に清涼寺仏という。ところでこの形式を有す像の作仏は平安時代末から鎌倉時代にかけて九州から北海道に至る全国各地で行なわれ、この龍宝寺本尊の釈迦如来立像もその一例である。清涼寺仏の構造上一見してわかる特徴は、頭部の毛髪の部分が他の仏像と異なり髪をたばねたものを縄状にまいたような独特の髪形をしていること (写真19)、体部

阿弥陀如来立像 (宮城県指定有形文化財：昭55.5.30)



写真22. 正面全景



写真23. 三尊

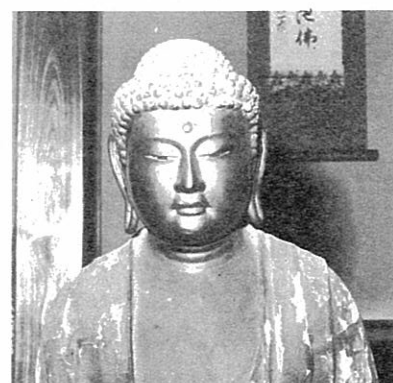


写真24. 面部 (正面)



写真25. 銘文 (陰刻銘)



写真26. 側面全景



写真27. 背面全景

所在地 仙台市新寺小路59
時宗法王山阿弥陀寺

像 高 78.3cm

製作年代 鎌倉時代 (承久3年：1221)

材 質 檜

阿弥陀寺本尊であるこの像は檜材玉眼入寄木造りの立像で、江戸初期の作と思われる聖観世音菩薩・勢至菩薩両坐像を脇侍とする三尊形式を有す (写真23)。この像の左足ほぞに「承久三年二月 日作佛僧宋實」の陰刻銘があり、書体は簡素で力強く、鎌倉期の特徴を有す (写真25)。造形は全体がすっきりまとまっており、彫技がやや浅目で固く繁雑さがなく、また大腿部を強調するY字形衣文を有することなど、快慶様の特色をよく伝承している。

釈迦如来立像



写真28. 正面全景



写真29. 正面全景 (光背付)

所在地 仙台市茂庭字綱木裏山4
臨濟宗妙心寺派霊亀山大梅寺

像 高 106cm

製作年代 鎌倉時代

材 質 桂

昔、郷六城敷地内にあった釈迦堂の本尊として安置されていたと伝えられるもので、寺伝によると四代藩主伊達綱村の時に大梅寺の本尊として迎えられたといわれる。

構造は、桂材彫眼一木造りの立像で、もと胎内仏を有したとの寺伝があることからわかるように、体部には広い内ぐりがある。右臂から下は後補となっているが、これは一度像が土中におかれていたとの伝えがあり、この時の破損部を修理したものであると思われる。彫眼であること、螺髪が彫り込みで、生え際がかるくM字形にうねりを描いていること等、鎌倉後期の作風の特徴がみられる。全体のバランスも良く、在仙の中世の仏像彫刻としてはきわめて秀作といえよう。



写真30. 面部



写真31. 側面全景



写真32. 背面全景

薬師如来坐像



写真33. 全 景 (厨子付)

所在地 仙台市東照宮一丁目1-19
天台宗眺海山仙岳院

像 高 31.4cm
製作年代 江戸時代初期 (承応2年:1653年)
材 質 不詳

現在仙岳院本堂東側に厨子ごと安置されているこの坐像は、元々承応3年(1654年)に仙台藩二代藩主伊達忠宗により建立された仙台東照宮の一宇薬師堂の本尊として安置されていたものを、明治初年の神仏分離の際に別当寺である仙岳院へ遷仏したもので、脇侍に日光・月光両菩薩ならびに守護神たる十二神将を従えている(写真34~48)。本尊

台座底部にある墨書銘によると東照宮建立の前年に当る承応2年(1653年)に真壁五左衛門尉正家なる人物が仏師左京に作仏させ奉納したとある。

像形は玉眼入り寄木作りで胡粉彩色が施されており、特に厨子入りであったこともあり保存はよく、胡粉彩色の仏像によく見られる彩色の剥落はほとんどない。

なお、台座・光背とも同時作と考えられるが、こちらの方は彩色の剥落が目立つとはいえ、全体的に見て工芸品としても秀作であるといえよう。

薬師三尊及び十二神将



写真34. 日光菩薩



写真35. 全 景



写真36. 月光菩薩



写真37. 宮毘羅



写真38. 伐折羅



写真39. 迷企羅



写真40. 安底羅



写真41. 頗儻羅



写真42. 珊底羅



写真43. 因達羅



写真44. 波夷羅



写真45. 摩虎羅



写真46. 真達羅



写真47. 招杜羅



写真48. 毘羯羅

十二神将

釈迦如来坐像（仙台市指定有形文化財：昭51.7.1）



写真49. 全 景

門町大仏師 法橋宋仁重次作」との銘文があり(写真50)、この像が寛文4年に作られたことがわかる。

なお、光背・台座とも文様・金泥の状況等からみてこの像と同時に作られたものと考えられる。

所在地 仙台市北山一丁目14-1

曹洞宗金剛宝山輪王寺

像 高 33.4cm

製作年代 江戸初期(寛文4年：1664年)

材 質 檜

檜材玉眼入り寄木造りの坐像で、体部には金泥が衲衣部には金箔が施されている(下地布張漆塗)。衲衣の装飾には江戸初期頃上方の仏師がよく行なった緑青で斜格子を入れ、中の花菱等の文様を浮き出させる手法が取り入れられている。像形は両手を膝上に禪の定印(法界定印)を結び、全体的に安定したスマートな姿をしている。像の底板には朱書で「御釈迦 寛文四年 甲辰十月吉日 御幸町通毘沙



写真50. 銘 文

釈迦如来坐像

所在地 仙台市新寺小路21

曹洞宗森城山大林寺

像 高 45.4cm(胎内仏6.9cm)

製作年代 江戸時代中期(寛保元年：1741)

材 質 檜

檜材玉眼入り寄木造りの坐像で、内ぐりされた体内に金銅製の坐像胎内仏及び墨書銘を記した木札を有す(写真52)。その銘文には(表)「寛文十三癸壬年當寺七世三列和尚現住之時、仙臺香町佐藤平兵衛懼於賊難竈置干新佛、其新佛作以廉荒、有長沼氏雕刻之新佛江奉竈者也、當寛保元率酉年八月初二日」(裏)「弘法大師実作老寸八分釈迦牟尼仏也、森成山大林十世大徹融誌焉」とあり、この像は寛保元年に長沼氏により作られたことがわかる。また胎内仏については弘法大師作とあるが、これについては不詳である。



写真51. 正面(全景)



写真52. 胎内仏・銘文



写真53. 背 面

阿弥陀如来坐像



写真54. 正面

鎌倉期を思わせる手法が使われているが、胸部正面に「卍」が切られていることなどから江戸時代の作、それも寺伝によると同寺が開山された万治2年(1659年)頃の作の可能性が高い。

なお、台座・光背・天蓋とも上塗りの金箔の状況から見て同時代のものと考えることが出来る。

所在地 仙台市三条町7-27
浄土宗円光山大法寺

像高 125cm余

製作年代 江戸時代初期(万治年間か?)

大法寺本尊のこの像は半丈六の坐像で、坐像では仙台最大のものと考えられる。

像形は玉眼入り寄木造りで像全体に朱漆が塗られ、体部には金泥が、衲衣部には金箔が施されている。部分的に見ると

阿弥陀如来立像

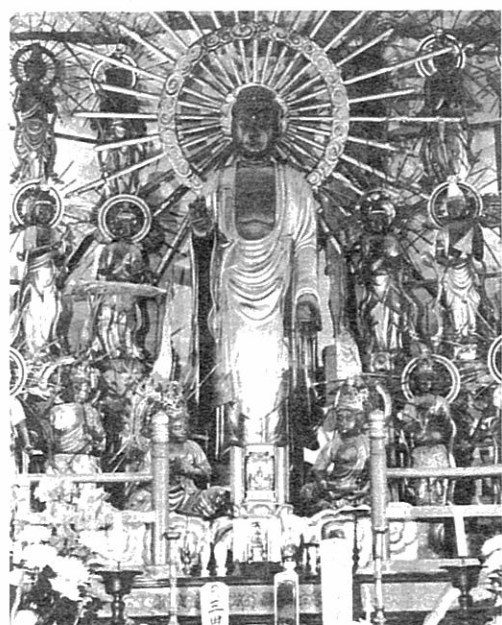


写真55. 正面

所在地 仙台市東九番丁39
浄土宗真成山報恩寺

像高 340cm余

製作年代 江戸時代

材質 不詳

報恩寺本尊のこの像は仙台市内の寺院では珍しい二十五菩薩を従えた寄木造りの半丈六仏で立像では仙台最大のものと思われる。

頭部の扁平な作り等に江戸期の特徴を有することなどから江戸時代の作と考えられ、また寺伝によると江戸中期までに寺が幾度か火災にあっていることもあって江戸中期以降の作である可能性が高い。

阿弥陀如来立像

所在地 仙台市東九番丁43
浄土宗無量山円徳寺

像高 82.4cm

製作年代 桃山時代(慶長2年:1597年)

材質 檜

檜材玉眼入り寄木造りの立像で、脇侍に観音・勢至両菩薩を従えた三尊形式をとる。昭和53年の宮城県沖地震の際損傷し、修理がなされたが、その折背面蓋内ぐり部分と仏頭内ぐり部分に慶長二年大仏師宗印及び善三郎作との墨書名が発見された。

その作りは内ぐりが均等でなく腹部の凹凸部のある部分では内ぐりをしすぎて穴をあけ、紙を貼り付け修理した状況にあるなど江戸時代以降によく見られる粗雑な作りであるが、銘文の発見により時代別の造像の基準を知る上での貴重な作例であるといえよう。

阿弥陀如来立像

所在地 仙台市新寺小路52
浄土宗十却山成覚寺

像高 66.4cm

製作年代 江戸時代初期

材質 檜

檜材玉眼入り寄木造りの立像で、脇侍に観音・勢至両菩薩を従えた三尊形成を有す。

全体的に薄手に作られているわりには正面から見るとふっくらとした抑揚があり彫技もすっきりとまとまっている。部分的に見ると頭部の扁平な作り、螺髪省略等江戸期の特徴を有すること等から江戸時代初期の作と考えられる。

なお、金泥の状況等から台座・光背とも同一時の作と考えることが出来る。



写真56. 正面



写真57. 正面

阿弥陀如来立像

所在地 仙台市新寺小路81
浄土真宗北原山真正極楽寺（正楽寺）
像 高 96.0cm
製作年代 中世（南北朝時代か？）
材 質 不詳



写真58. 正面

阿弥陀如来立像

所在地 仙台市東九番丁39
浄土宗真成山報恩寺
像 高 98.0cm
製作年代 中世（南北朝時代か？）
材 質 不詳



写真59. 正面

阿弥陀如来坐像

所在地 仙台市岩切字入山20
曹洞宗本松山東光寺
像 高 37.0cm
製作年代 江戸時代初期
材 質 檜



写真60. 正面

阿弥陀如来坐像

所在地 仙台市新坂通13-1
浄土宗大鶴山昌繁寺
像 高 45cm
製作年代 中世（室町時代か？）
材 質 不詳



写真61. 正面

釈迦如来坐像

所在地 仙台市東照宮一丁目1-19
天台宗眺海山仙岳院
像 高 60.8cm
製作年代 江戸時代中期（明和2年：1765年）
材 質 檜



写真62. 正面

阿弥陀如来坐像

所在地 仙台市東照宮一丁目1-19
天台宗眺海山仙岳院
像 高 61.8cm
製作年代 江戸時代中期
材 質 不詳



写真63. 正面

語句解説

- 台座………仏像がのっている台のことで、台座には蓮華座（蓮台：蓮の華を形どったもの）・岩座（岩を形どったもの）などがあり、如来・菩薩・明王は蓮台にのることが出来るが天部は岩座でなければならない等のきまりがある。
- 光背………仏像の背面を飾っているもので、仏の威光・すなわち後光を表わしたもので、形式的には舟形光背（写真18・22・29などにみられるような形）・輪光背（写真61に見られる形）・放射光背（写真7・58などに見られる形）などがある。
- 天蓋………堂内の天井からつるすおおいがさのような形をしたもの。
- 印相………仏像が両手の指で現わしたさまざまな動きのことで、インドでは古来手指で意志を示す習俗があり、印相も同じく仏像の意志の表現とみることが出来る。その仏像の種類によって一定の印相が定められているところからその印相により仏像の種類を判定するきめ手になる場合がある。たとえば金剛界大日如来の智拳印（写真11）・胎藏界大日如来の法界定印（写真12）・釈迦如来に見られる施無畏・与願印（右手は臂をまげ掌を外に向けて五指ともにのばしてたて、左手は右手と同じ形に下げる印：写真18）・阿弥陀如来の上品下生印（右手は臂をまげて掌を外に向けて開き、第一指と第二指をまげの輪をつくり、左手は右手と同じ形に下げる印：写真22）・上品上生印（左右の掌を前で組み、両手の第一指と第二指をまげて輪をつくる印：写真54）などがある。
- 一本造り………仏像の本体を一つの本から彫り出した像。平安時代以前の仏像に多い。
- 寄木造り………二本ないし四本の本をつぎ合わせて仏像を彫り出す手法で、一本造りと異なり大きな像を作り出すことが出来る。平安時代後期の仏師定朝があみだした手法といわれる。鎌倉時代以降の仏像彫刻のほとんどがこの手法によるものである。
- 内ぐり………仏像の体部の内側をけずって像の重量を軽くするとともに木材の乾燥からおこるわれを防ぐために行なわれるもの。
- 彫眼………仏像の眼を彫りにより表現したもので、平安時代以前の仏像は殆どこの手法がとられている（後世に改作されているものは別）。
- 玉眼………面部の前面をはいで眼の部分を通して水晶等をはめこんだもので、鎌倉時代以降の仏像の殆どがこれである。
- 銘文………仏像を作った年月日、作者、作成理由等を像に記したもので、墨で像内部に書かれたもの（墨書銘）、像の足ほぞ等に彫り込まれたもの（陰刻銘）などがある。
- 胡粉塗………貝殻を焼いてつくった白い粉（石灰）をといて像の下塗りとし、その上に顔料で彩

色する手法。特に江戸時代の仏像に多く見られる。

脇侍………脇立・來侍ともいい、如来の左右に侍している菩薩。

二十五菩薩………阿弥陀來迎図に見られる阿弥陀如来に随従する二十五種の菩薩像（報恩寺の二十五菩薩の場合：上段向って左より宝蔵菩薩（以下菩薩略）・白象王・徳蔵・普賢・薬王・薬上・三昧・定自在王、中段向って左より大威徳・華嚴・獅子吼・金蔵・大自在王・光明・山海恵・月光王、下段向って左より無辺身・陀羅尼・日照王・虚空蔵・聖観世音・勢至・衆宝王・金剛蔵・法自在王の二十五軀）。

半丈六仏………丈六とは一丈六尺（約4.8m）の長さを指し、丈六仏というと一丈六尺の像高を有する仏像のことをいう。従って半丈六仏の場合はこの約半分の像高を有する仏像のことである。ところで、この丈六・半丈六仏という場合の像高は像が直立した時の高さを指すことから立像はともかく坐像の場合はこの半分の像高となる。なお、丈六・半丈六仏といっても必ずしもメートル法という4.8m、2.4mの像高を有する仏像ではなく、それに近い像高を有する仏像全てを指す。また同じ一丈六尺といっても時代により仏師の用いる尺度が違うため同じ長さではない。

秘仏………信仰上の理由から秘めて人前には見せない仏像。厨子等に納められており平生は一般に公開しない。

清涼寺仏………京都嵯峨の清涼寺本尊の釈迦如来像の模像。清涼寺の像は東大寺の僧齋然（938～1016）が中国より開元寺の釈迦像の模像を持ち帰って納めたもので、日本では平安時代末から鎌倉時代にかけて清涼寺仏として全国的に普及したものである。

仏伝………釈迦牟尼の伝記

参考文献

- 仏像図典 佐和隆研編 吉川弘文館
仏像圖彙 紀 秀信著 国書刊行会
仏像の再発見 西村公朝著 吉川弘文館
図解・寺院めぐり必携（大法輪選書） 大法輪閣
仏さまの履歴書 市川智康著 水書坊
仏像調査緊急実態調査略報（仙台市文化財調査報告書第28集 年報2収録）

掲載仏像所蔵寺院所在地一覽表

寺院名	宗派	所在地
阿弥陀寺	時宗	仙台市新寺小路59
円徳寺	浄土宗	〃 東九番丁43
正円寺	〃	〃 新坂町6-1
成覚寺	〃	〃 新寺小路52
昌繁寺	〃	〃 新坂町13-1
正楽寺	浄土真宗	〃 新寺小路81
真福寺	時宗	〃 土樋223
仙岳院	天台宗	〃 東照宮一丁目1-19
大梅寺	臨済宗妙心寺派	〃 茂庭字綱木裏山4
大法寺	浄土宗	〃 三条町7-27
大林寺	曹洞宗	〃 新寺小路21
東光寺	〃	〃 岩切字入山20
報恩寺	浄土宗	〃 東九番丁39
龍宝寺	真言宗御室派	〃 八幡四丁目8-33
龍泉院	曹洞宗	〃 東九番丁26
輪王寺	〃	〃 北山一丁目14-1

編集後記

本冊子の編集にあたり30軀余の仏像の写真に掲載した。

ところで、仙台では一寺院で所蔵している仏像数は比較的少ないこともあって（仙岳院は例外）、特に如来像というとその寺院の本尊として安置されているものがほとんどである。したがって今回の写真も各寺院の好意から撮影させていただいたものであることもあり、宗教上の理由から正面からの写真が多くなった。また、図1に掲載した阿弥陀如来立像（阿弥陀寺蔵）の略図は、阿弥陀寺の河野方丈の好意により昭和56年2月12日、18日の両日、宮城県教育委員会文化財保護課狩野正昭技術主査、新庄屋元晴技術主査、手塚均技師、太田昭夫技師とともに渡辺洋一が実測を行なった実測図をもとに、渡辺が作成した略図である。

なお、今回は如来部に焦点を合わせたこともあり、脇侍仏として掲載した菩薩像その他については解説を記さなかったが、これらについては次回以降に詳細な解説を行なう予定である。

仙台市文化財パンフレット刊行目録

- 第1集 仙台のあゆみと文化財
- 第2集 埋もれた仙台の歴史
- 第3集 仙台市の古建築Ⅰ（明治以前）
- 第4集 仙台市の古建築Ⅱ（明治以後）
- 第5集 仙台市の古建築Ⅲ（失われた古建築）
- 第6集 仙台市の仏像彫刻Ⅰ（如来部）

仙台市文化財パンフレット第六集

仙台市の仏像彫刻Ⅰ

（如来部）

昭和57年3月31日 初版発行

昭和57年6月15日 重版発行

編集・発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町三丁目7-1

印刷 (株) 東北プリント
仙台市立町24-24
TEL (63)1166(代)